

## アリストテレス形而上學に於ける

### 本質の概念

後 藤 孝 弟

アリストテレスが其の形而上學書に於て種々なる意味に於ける存在の概念を檢討しながら如何に眞實在を追求したかを三つの方面から、即ち(一)本質の定義論、(二)存在に關する固有なる生成論、(三)彼の形而上學に於ける哲學的方法そのもの、反省から辿つて見やうとするのが此の小論文の意圖である。

一

先づアリストテレスは廣く存在するものを次の四つに分類して考へた。即ち(一)偶有的存在、(二)範疇の諸形式に屬する存在、(三)眞及び偽としての存在並びに(四)可能及び現實としての存在が其である。<sup>1)</sup>先づ第一の偶有的存在と言はるゝ所のものは本質的屬性に對して偶有的屬性と言はるゝ所のものであるが、其は如何なる學問の對象ともならないものである。學問は凡て原因原理を求め<sup>2)</sup>る。然るに偶有的存在

に關しては何等の原因をも求むる事は出來ない。強ひてその原因とも考へられるものを求むれば質料が其であらう。<sup>3)</sup>然し質料と偶有的存在との間には如何なる必然的關係をも見出す事は出來ない。偶有的存在は其れの存在の必然的理由を持たぬものである。<sup>4)</sup>偶有的存在は正しき意味の生成に依れるものでなく偶然的に生成されたるものである。<sup>5)</sup>斯くて學問が凡て原因原理を求むるものである以上偶有的存在に就いては何等の學問も存在し得ないのである。次に第三の眞僞的存在に就いてはそれは存在の本來なる問題に關するものでないとしてアリストテレースは是を形而上學の問題からは排除した。<sup>6)</sup>主辭と賓辭との結合分離が對象の側と一致するか否かに依つて其は眞或は僞と言はれる。斯くの如き意味に於ける眞僞は存在に關するものではなく寧ろ論證的思惟に關するものである。従て其は存在の特殊なる領域を持たないものである。<sup>7)</sup>我々の問題とする所は存在其れ自身に關してである故に斯くの如き意味に於ける存在はしばらく當面の問題からは遠ざけられるのである。次に第二の部類に屬する範疇的存在こそ我々の當面の問題とする所である。範疇的存在は本質的存在であると言ふ事が出來るであらう。我々は或ものの本質に關して或時は其の何であるかを即ちウジアを或時は其れの質を或時

は其れの量を問ふ。<sup>8)</sup>而して範疇なるものは斯くの如き問の終局的なる類概念であると言ふ事が出来る。<sup>(註一)</sup>範疇の諸々の形式の中でも第一の形式即ちウジアに屬する所のものが最も重大なる意味を持つものである。形而上學に於てはウジアの範疇に屬するものゝみが主として論せられてゐる。第一義的に存在すると言はるゝ所のものはウジアであり他の範疇に屬する存在は凡てウジアに依存的である。<sup>9)</sup>然しながらウジアにも種々なる意味があつて決して一様には考へられてゐなかつたのである。アリストテレースに依ればウジアは次の三つの意味に於て他の範疇的存在に對して最初のもの (*τὸ πρῶτον*) であると言はれる。<sup>10)</sup>(一)ウジアは獨立的存在なるに反して他の存在は凡てウジアに依存しつゝ存在し其を離れては存在する事は出來ない。(二)ロゴスに於てウジアは先行する。即ち他の存在のロゴスは必然的にウジアの其れを伴ふものであるが、ウジアの、ロゴスは他の存在の其れを必要としない。(三)ウジアは知識に於て他の範疇的存在に先行すると言はれる。即ちウジアの知識は同時に他の存在の知識をも可能にしウジアを知るものは他のものを知るものより最も良く知るものであるから。偕、是等の三つの意味の中第二の意味に於けるブリオリチイは結局無意味であらう。何となればウジアのロゴスと雖も他の範疇的

存在のロゴスから全く切離して獨立に可能であるのではないから<sup>11)</sup>。殘る第一、第三、の意味に於けるプリオリチイに關して我々の問題とする所は存在するのである。第一の意味のプリオリチイを説く時アリストテレースは形相と質料との合成物としてのウジアを考へて居り是に反して第三の其は本質或は本性としてのウジアを意味するものと考へられる<sup>12)</sup>。ウジアに關するこの二重の意味こそアリストテレース形而上學の到る所に於て煩瑣なる問題を惹起せしめたる原因であると共に又重要な意味を荷ふものでなければならぬ。我々の當面の問題たる本質概念の核心も又實にこゝに存するのである。

形而上學第五章第三節に於て一般にウジアと考へられ問題とされてゐるもの四つを次の如くに列擧してゐる。即ち(一)本質或は本性(το τί ἐστιν) (二)普遍概念(το καθόλου) (三)類概念(γενος) (四)基體或は質料(ἰμπεριεχόν)。<sup>13)</sup>我々はアリストテレースに從て是等の概念を一つ一つ檢討して見やう。先づアリストテレースは基體を問題として見た。主語となつて述語とならぬものが眞のウジアであるなら基體こそその名に價するものと先づ一應は考へられる。何となれば基體は凡ゆる屬性が、その上に於て在る所のものでありそれ自身は決して普遍的概念の中に取入るゝ事の出來

ない絶對的個別性を持つものであるから。然しながら基體の概念も嚴密なる規定を必要とする。基體と考へられてゐるものは(一)質料 (ὕλη) (二)形 (μορφή) (三)合成物 (σύνθεσις) の三つである。<sup>14)</sup> 然しその中固有の意味に於て基體と呼ばれてゐるものは質料及び合成物としての基體であつた。先づ質料としての基體へウジヤを求め、事が出来るであらうか。窮局的基體としての質料はウジヤの名に價しないものである。何となれば其は一切の規定を抜去つて考へられた所の抽象的なる質料であつて其自身は何等の性質即ち積極的にも消極的にも何等の性格を持たぬものであるから。<sup>15)</sup> 如何に基體の意味を重要視したとは言へアリストテレースは何處までも質料的立場ではなく形相の立場であつた。ウジヤは獨立性 (ἰσχυρότης) と個別性 (ἰδιότητα) との二つの性格に依つて色附けられてゐなければならぬ。<sup>16)</sup> 而して獨立性と個別性とは單なる質料に於ては之を求むる事は出来ない。それは先づ形相の側に求めらるべきものである。何等かの意味にて形相のある所へ先づウジヤは求められねばならぬ。次に第二の意味に於ける基體たる合成物としての個物は質料と形相との結合であり現象として興へられる一種の存在であつて尠くとも是れ (ἕξις) として在る所のものである。それは單なる質料的存在ではなく既に形相化されたる存在

である。範疇論に於ては個物は第一本體とされたのである。アリストテレスが個物の實在性を主張する時は常に一般的述語に對して個物が *μονογενές* として存在すると言ふ點に在つたのである。共通の述語は *τοῦτο* としての存在をでなく *τοῦτος* としての存在をのみ示すものである故、如何なる一般者もウジアであると云ふ事は出來ない。<sup>17)</sup> 若し然らずとすれば種々なるアポリアに陥るであらう。一般者をウジアであるとすれば先づ第一にウジアの個別性は失はれなければならない。更に其と關聯してウジアの統一性も失はれる。何となれば一般者を構成要素とすれば主語となつて述語とならぬウジアは一般者の合成物と成り終るから。ウジアは現實的に存在するものゝ合成物である事は出來ない。更に一般者が個別的存在の外に現實的に存在するとすれば所謂第三の人間のアポリアに陥らねばならなくなる。<sup>18)</sup> 或哲學者達は *εἰς* 或は大小と言ふが如きものを事物の構成要素と考へた。<sup>19)</sup> 成る程一般的なるものがより多く原理的であるならば最高の一般者は一切のものを包括する故に最高の原理ともなるかも知れない。<sup>20)</sup> 然しながら斯くの如き包括的一般者は一切の範疇的存在に關係するものであり従つて結局何れの範疇にも屬さぬものである。<sup>21)</sup> 其は終に類概念をすら形成し得ない所の抽象的一般者と言ふの外はないであらう。<sup>22)</sup>

斯くの如き全然内容を持たぬ一般者はアリストテレースは是を範疇から殊にウジアの其れから除外したのである。範疇論に於て個物こそ第一本體とされたのも此の爲めであつたと考へられる。何等の規定を持たぬ質料と同様に何等の内容をも持たぬ形相は抽象的である。ウジアは飽迄個別的存在でなければならなかつたのである。こゝに於て主語となつて述語とならぬと言ふ個物こそウジアであると思へられる。一般的に *kosmos* に適用される共通の述語は個別的なウジアを示すものではなく、却てウジアの質とか量とかを示すものである。<sup>23)</sup> 質とか量とかはウジアの屬性と考へられるものであつてウジア自身は他のものに屬さないものである。或他の主體に保たれて存在しないと言ふ事はウジアの一般的なる特徴であると言へやう。<sup>24)</sup> 個物としてのウジアは一切のものゝ主語とはなるが自らは何ものゝ述語ともならぬ故に個物こそウジアの名に最も相應しきものと考へられる。然しながら主語となつて述語とならぬと言ふ規定は未だ抽象的であり曖昧たるを免れない。其れは消極的なる規定に過ぎないとも言はれやう。<sup>25)</sup> そこでウジアは主語となつて述語とならぬ *τόσθεν* としての個別的存在であると同時に又 *καθ' ἑαυτὴν* としての存在でもなければならぬのである。<sup>(註二)</sup> 即ちウジアは個別的であると同時に定義されうる

ものでなければならぬ。然るに現象として存在する合成物としての個物は偶有的屬性の基體ともなるもの故定義する事は出来ない。移り變る限りとしての存在は定義の對象となるものではなく感覺の助けに依つてのみ知られ得るのである。<sup>26)</sup>消滅變化する個物に關しての *indefinitus* は不確實なるドクサに過ぎない。かくて我々は基體の側にウジアを求める事には失敗したのである。是に於て我々は基體の問題を未解決のまゝとして形相の側に立歸つて考へ直して見なければならぬ。

種 (*eflōs*) は範疇論に於ては第二本體とされ個物の述語ともなるものとされてゐる。然しながら種が個物に對する關係は他の範疇的存在が個物に對する關係とは自ら異なる所が無ければならない。個物の屬性は個物に保たれて現存するものではないが種は個物の屬性ではない。<sup>27)</sup>種は第一本體と共に他の主體に保たれて存在しないと言ふウジアの一般的特徴を持つものである。かくて種は個物の屬性からは區別されてウジアの範疇に屬するものとされたのである。種概念の指示する所のものは個物の屬性ではなく又合成物としての個物でもなく、個物の本質そのものである。範疇論に於ては諸所に於て種は個物に述語されるものであると言はれてゐるが、其は屬性が述語となると言ふのと同一の意味に於てははない。眞の意味に於

ける種は個物を包攝する概念ではなく永遠に變らぬものとしての個物の本質でなければならぬ。本質は完全なる規定即ち定義を伴へる存在である。本質は類概念を最後の種差に依つて劃然と限定する事に依つて定義されるものであると言はれる。その場合に類概念は種差に對しては規定されるものとして質料が形相に對するが如き關係に立つものである。<sup>28)</sup>こゝに言ふ最後の種差とは即ち一切の本質的屬性の綜合を意味するものであり従てそれは個物を包攝する一般概念をでなく個物の本質的存在そのものを規定するものである。<sup>29)</sup>最後の種差を含めるロゴスと共に在る存在こそ本質でありそれは飽迄個別的なる存在でなければならぬ。斯くの如きものにして始めて具體的なる意味に於て主語となつて述語とならぬと言はれる可きものである。合成物としての個物は主語となつて述語とならぬと言ふ規定に依つては只消極的にしか把握され得ないものである。偕て然しながらこゝに問題となるのは一切の本質的屬性の綜合としての最後の種差は如何にして得られるかと言ふ事である。一般概念は之を如何に特殊化して行つても終に最後の種差へは達する事の出来ないものである。飽迄概念の立場に立ちながら而も個別的なる存在としての本質を把握し得るものなのであらうか。類概念をば最後の種差に

依つて劃然と規定すると言ふ事は如何なる事であらうか。即ち定義そのものゝ本質的意義を我々は如何に考ふ可きなのであらうか。

我々はこゝに本質の定義を次の二つのものから區別する事に依つて其の意義を明らかにし得ると考へる。先づ(一)定義は本質の明徹(durchsichtig)にして劃然(scharf-misssen)たるロゴスである故に未限定なる個物的存在の不確實なるドクサからは嚴密に區別されなければならぬ。消滅變化する限りとしての個物的存在は感覺と結び附けるものであり其れに關してドクサを持つともそれは普遍妥當なる確實性をば要求する事は出來ない。流れて止る事なき存在は又絶えず移り變らねばならぬ概念と共に在る。本質の定義は斯くの如きドクサからは明らかに區別される。然しながら又一方(二)定義の持つ確實性は論證する事に依つて與へられるものでもない。本質のロゴスは論證されるものではなく只本質的屬性の存在が本質の概念を通して論證されるのみである。論證に於ては眞理と呼べるゝ所のものは誤謬と相對的に對立してゐるものである。然しながら本質の定義に於ては對立的眞僞が問題となるのではなく只知ると言ふ事と知らないと言ふ事とがあり得るのみである。知るといふ事は接觸する(Berühren)事であり知らないと言ふ事は接觸しない

事である。<sup>30)</sup> 接觸してゐる場合にはそれは眞僞を超越した意味に於て常に眞理性を持つのである。事物のまゝは只々接觸し得るのみの存在である。定義はまゝに關するものであつて其れが如何なる要素から成立してゐるかとか如何なる性質を持つかと言ふ事が問題となるのではない。この故にアンチステネース學派が持ち出したアポリアは或意味に於ては當を得たものであると言へやう。その學派の人達はまゝは simple なものでありそれを定義せんとすれば long formula に陥ると言ふ。そこで銀を定義する場合には銀は錫の様なものであると言ふより外無いと言ふのである。<sup>31)</sup> 成る程銀は冷いか銀は何々から成るとか言ふよりも銀は錫の様なものだと言つた方が銀の本質をよりよく示してゐるものと言へやう。まことに事物は常に自らその本質をあらはしてゐるのみの存在でありその本質を指し示すものはその屬性の述語ではなくその本質の定義である。<sup>32)</sup> 本質は論證される可きものではなく定義に依つて指し示し得るのみの存在である。定義する思惟は論證する思惟よりも寧ろ直接に對象を受取り對象と一となると言ふ點に於て感覺に似通へるものであるとも言はれやう。この故に定義は論證に關係して論ぜらる可きものではなく寧ろ一度はそれと區別せられたるドクサと關係してこそ考へらる可

きである。ドクサは事物が我々に現はれるまゝの片鱗をしか掴んでゐないと言ふ點に於ては定義から區別されるがそれは既に事物のまゝに關するものなる點に於て既に一種の定義であるとも言はれやう。實在の言ひ表はしであると言ふ點に於ては定義もドクサも同じであるが本質に結び附いたものであるか否かと言ふ點に於て相異なるのである。ドクサは感覺と結び附けるロゴスの一種でありそれと共に在る所の存在は不純なる存在である。然しながら其は純化され得る可能性を持つ所のものであると言ふ點に於て重要性を荷ふのである。この點に關する詳細なるドクサの分析は後に(第三章)譲りこゝには只定義は事物のまゝの直接なる言ひ表はし (*thyeu kai ph'rau*) であると言ふ事を明らかにして置くに止めやう。

思ふにアリストテレースは自然界に存在する個々の生物に就いて眞に種(エイドス)と言ふものを直觀したのであらう。其は單なる一般概念と考ふ可きではなく個物に於て直接に見られ而して言ひ表はし (*thyeu kai ph'rau*) 得るのみの存在であつた。哲學者としてのアリストテレースの努力はこの直觀されたものを如何にして學問的に概念的に言ひ表はす可きかに存してゐたのである。けれどもこゝに注意す可きは本質と定義とは模寫とか平行とか言ふが如き關係に於てあると考ふ可きでは

なく本質は定義に依つて志向されるものとも考ふ可きであらう。<sup>33)</sup> 定義は本質の象徴 (εἶδος) であり本質は定義を離れては存在しない。本質と定義との關係は言はゞ精神と肉體との關係とも類推す可きであらう。

(註一) マイヤアに依れば範疇は最も廣義の存在即ち本質的並びに偶有的存在をも含むものとなる。(Meteor, syllogistik d. Arist. II. 2. s. 326) 又アリストテレースも屢々範疇をばその意味に解して使用してゐる。範疇が何等の秩序もなく雜然と存在一般を含むものとなれば偶有的存在と雖も存在を々として範疇の中に屬せしめ得るかも知れない。然しながら學問的であるを言ふ事々否との區別がアリストテレースに於ては殊に重大であつたと言ふ點並びに Analytica Post. 83<sup>a</sup> 24—34. met. Δ. 7. met. E. 2. 等に於ては偶有的屬性と範疇的存在との明白なる區別が説かれてゐる點よりして我々は是等の兩者を嚴密に區別するのを妥當であるを考へる。

(註二) γενετικός は εὐθεία εὐθείαν τῆς の意味にも屢々用ひられるが(例へば met. 1028<sup>a</sup> 34) γενετικός は矢張りアリストテレースに於ても定義されしるを言ふ事であつたと思ふ。 εὐθεία εὐθείαν τῆς は本質にも個物にも言はれしる事であるが, ζώοντες は個物ではなく本質の特徴であつたを考へられる。

(1) met. Δ. 7. (2) met. 982<sup>a</sup> 1. (3) met. 1027<sup>a</sup> 14. (4) Analytica Post. 75<sup>a</sup> 18—21. (5) met. 1026<sup>b</sup> 22. (6) met. 1027<sup>b</sup> 17—33. (7) met. 1028<sup>a</sup> 1. (8) Topica. 103<sup>b</sup> 27. (9) met. 996<sup>b</sup> 14—20, 1028<sup>a</sup> 9—30, 1003<sup>a</sup> 33—<sup>b</sup> 15, 1045<sup>b</sup> 31. (10) met. 1028<sup>a</sup> 32—<sup>b</sup> 2 (11) Ross. Aristotle pt 56 (12) ibidem. (13) Met 1028<sup>b</sup> 34. (14) met. 1029<sup>a</sup> 14, 1042<sup>a</sup> 28. (15) met. 1029<sup>b</sup> 7—25. (16) met. 1029<sup>a</sup> 27 (17) met. 1038<sup>b</sup> 35. (18) met 2, Chapt. 3. (19) met. 998<sup>b</sup> 9. (20) met. 998<sup>b</sup> 17 (21) Trendelenburg, Geschichte d. Kategorienlehre, s. 66 (22) met. 1053<sup>a</sup> 20 (23) De Soph. Elen. 179<sup>a</sup> 7. (24) Categ. 3<sup>a</sup> 6. (25) Trendelenburg ibidem. S. 63. (26) met. 1036<sup>a</sup> 6 (27) Categ. 1<sup>a</sup> 20, 3<sup>b</sup> 10—22 (28) met. 1024<sup>b</sup> 8 (29) Analytica Post. 96<sup>b</sup> 6—14. (30) met. 1051<sup>b</sup> 17 (31) met. 1043<sup>b</sup> 24—28 (32) Topica. 135<sup>b</sup> 11. (33) Geysen Erkenntnistheorie d. Arist. S. 91.

## 二

プラトンのイデアの世界を不動の世界であるとすれば現象界はそれが常に生成し發展して止まないと言ふ事に依つてイデアの世界から區別される<sup>1)</sup>。アリストテレスは常に現象界を見守りつゝその中から本質を擱み出さうとした。プラトンに於ては現象の世界からは如何にするもイデアの世界へは達する事は出来なかつた。然し各自に取つて可知的のものから出發し本性に於て可知的のものへ達せんとする<sup>2)</sup>のがアリストテレスの方法であつた。各自に取つて可知的のものとは最も手近な個物としての存在とも考へられるであらう。個物は形相と質料との合成物であり感覺と結びつきながら現象として與へられてゐるものであつて未限定的なる一種の存在である。そのまゝでは其は捕捉する事の出来ないもの常に生成し發展するものである。是に於てアリストテレスは現象としての存在をその構成原理に分解した。彼の四つの原因は即ち生成發展する個別的存在の構成原理として考へられたるものである。

先づ質料が一つの原因と考へられてゐる。然し質料は形相に對して積極的の意味を持つもの<sup>3)</sup>として生成の原理となり得るのであつて、所謂第一質料は抽象的思惟の

産物であり生成の原理に與る事は出来ない。ミレートス學派は存在及生成の原因を第一質料に求めた。<sup>4)</sup> 成程生成されたるものは第一質料から生じ又そこへ歸つて行くものとも考へられるであらう。然しそれは生成の抽象的の一面的觀察に過ぎぬ。我々は生成の全過程に於て質料を考へなければならぬ。然る時は質料を全く無規定の第一質料とする事は出来ないであらう。原理としての質料は既に内含的に形相を持つものでなければならぬ。かくて生成の原理としての質料は必然的に形相を呼ぶ。

形相は質料をして質料たらしめ是に規定を與ふる所のものである。生成の過程に於て規定者である限り形相は質料に先行する。但しそれは質料無くしても形相が存在の原理と成り得ると言ふ意味に於ては、質料が質料として存在しうるのも形相の爲めであると言ふ意味に於てである。即ち形相は生成の出發點である。<sup>5)</sup> 凡ゆる生成は單なる質料からでなく形相から始められる。形相の存在する所にはそれが本質として、<sup>6)</sup> 又個物として、<sup>6)</sup> 單なる質料よりもより多き實在性がある。ロゴスは質料にではなく形相と共に在る。形相無き所にはドクサもロゴスも無い。實在の一つの特徴たる *Xoiphoton* はロゴスと結び附き得る所の形相の性質に外なら

ない。然し其であるからと言つて形相は質料を見捨てるのではない。實在の他の特徴たる *Topos* は實に形相と質料との内面的なる相關々係から來るのである。形相が質料を見捨てた時我々は存在の説明原理を失はねばならぬ。徒らに形相を質料から切離して考へるのは無益の事である。質料が形相を呼び形相へ進むと言ふが如きものであるとすれば形相は質料を顧み質料を動かすものとも言へやう。

質料との相關々係に於て考へられた具體的形相は又動かすものとして生成の原因となる。形相は質料の規定者として存するのみならず生成の過程を進行せしむる動力因ともなる。生成は凡て *from something to something by something* であるが動力因は *by something* 即ち *agent* である。溫冷の對立愛憎の葛藤をば現象の生成運動の説明原理として考へた哲學者もあつた。けれども彼等の考へた動力因は單に機械的必然的なる原因としてあつた。即ち彼等の動力因は事物の中に潜む本性としてゝはなかつたのである。<sup>s)</sup> 本性としての動かすものは實は運動の始めでもあり又その終りでもある。動きつゝあるものに於て存在する形相は未だその終局の目的に到達せざる不完全なる現實性であると考へられる。凡ての生成し運動するものにはその行きつく所が無ければならない。

凡ての生成運動は目的に向つて進む<sup>9)</sup>。生成運動は其れの目的即ち<sup>10)</sup>に到つて終りを告げ全き現實性として存在するのである。然し目的は無限の彼方にのみ存するものではなく運動するもの、中に潜みその過程を規定するものである。運動に於て存するものも既に幾分の目的を實現してゐるのである。

以上四つの生成の構成原理は内的聯關を持つものでありばらくの抽象的なるものではない。生成の最初のものとして形相最後のものとして目的而してその中間の運動の過程に於て動かすものが考へられるが是等は別々のものではなく可能性としての質料に對しては同様に現實性であると言ふ事が出来る。故に四つの構成原理の概念は可能性と現實性との二つの新しい概念に收めて考へる事が出来る。形相と質料とは相對立するものではあるが内的聯關を持つものであり全く別々のものではない故に其等の結合原理を別に求め様とする事は間違つてゐる<sup>10)</sup>。形相と質料とは一は現實性として他は可能性として考へる時は二にして一なるものとなる<sup>11)</sup>。可能とは或特定の現實に對してその現實になる事が不可能でない事を言ふのである<sup>12)</sup>。但しそれは論理的の可能不可能ではなく一種の存在の様態と考ふ可きである。純粹なる活動とも言ふ可きものに於ては可能と現實とは區別する事は出来

ない。人が或事を爲し度いと思ひその事が爲される可く不可能でないならば其の事は爲されるであらう。<sup>13)</sup> 完全なる現實性に於ては一切の可能は凡て現實の中に現實化され直してゐるのである。然し在るがまゝの現實の世界を見渡す時は可能としての存在も考へられるのである。現象の世界は運動し生成する世界であり完全なる現實性に達してゐない限り可能性の世界である。然しそれは既に目的に向つて動きつゝある以上幾分かの現實性を持つてゐるものでなければならぬ。其は謂はゞ不完全なる現實性であると言はれやう。<sup>14)</sup> 偕て可能に對して現實は次の三つの意味に於て先行すると言ふ事が出来る。<sup>15)</sup> 即ち(一)定義に於て、(二)實在性に於て、(三)時間に於て。先づ明らかに定義に於て現實性は可能性に先行する。何となれば或ものの可能性は、それが或特定の現實性に成り得ると言ふ事に依つて規定されるからである。従て現實性の定義は可能性の其れに先行しなければならぬ。次に又現實性は實在性に於て明らかに可能性に先立つ。生成の最後に於て在るものはその過程に於て在るものよりも實在性をより多く持つてゐなくてはならない。質料はその形相を獲得せんが爲めにのみ可能として存在するのであつて一度それが現實化されるや可能であつたものはそのエイドスに於て存在するのである。最後に現

實性は時間に於ても可能性に先立つと言ふ事が出来る。個體の可能的狀態はそれの現實的狀態の前にあるとは言へ個體を生めるものは既に現實性として存在してゐなければならぬ。第一原動者が考へられるのも此の爲めである。<sup>16)</sup>かくて運動し生成するものに於てはその現實としての形相は可能としての質料の中に潜みかくれてゐるが、一度運動のテロスとしての其の完全なる現實性に到達する時は其の本性は明徹劃然たるロゴスを伴へる形ある狀態(エイドス)として存在するのである。運動の始めであり運動の終りであり運動を起すのこそ當に在る可く在つたつた所のもの(τὸ τι ᾧ ἐκίνηται)であり本性的に第一のもの(πρῶτον τῷ φύσει)であるのである。形而上學者としてのアリストテレスは齷齪たる智識の範圍をのみ低回する事なく深く實在そのものに肉迫して行つた。而も彼に取りては一方最も實在的なるものこそ最も可知的であると言ふ事が抜く可からざる強き要求であつたのである。此の故に彼は幾多のアポリアに苦しめられ前後の矛盾を冒し數多くの問題を殘してその形而上學書は終に未完のものたるを免れなかつた。然しそれにも拘らずアリストテレスの一致し難く見ゆる二元的要求は本質に於てこそ充され得可きものと我々は考へる事が出来る。本質に於ては性格と存在とは離れ難く結び附いて

ゐるのである。

- (1) Siebeck, Aristotels (2) met. 1029<sup>b</sup> 6 (3) Jaeger, Arist. S. 206 (4) met. 983<sup>b</sup> 6—19 (5) met. 1034<sup>a</sup> 30 (6) met. 1029<sup>a</sup> 5, 28.  
 (7) met. 1036<sup>b</sup> 21 (8) met. 983<sup>b</sup> 6—10, Ross, Note, I. 136. (9) met. 999<sup>b</sup> 10 (10) met. 1045<sup>b</sup> 20 (11) met. 1045<sup>b</sup> 17  
 (12) met. 1048<sup>a</sup> 24 (13) met. 1047<sup>a</sup> 23 (14) met. 1066<sup>a</sup> 21 (15) met. 1049<sup>b</sup> 10—1050<sup>a</sup> 16 (16) met. 1049<sup>b</sup> 25.

### 三

我々は最後に形而上學に於けるアリストテレースの哲學的方法そのものを反省する事に依つて眞實在としての本質の概念を一層明らかにし得ると考へる。何となればアリストテレースに於ては眞實在としての本質は彼の方法そのものをも規定したと考へられるからである。

何人も先づアリストテレースの方法として特殊的事實から普遍概念へ進む歸納的方法と普遍概念から特殊的事實へ達する論證的方法の二つを數へる事が出来るであらう。けれども形而上學に於ける本質探究の方法は歸納法でもなく論證法でもなかつたのである。若し本質が歸納法に依るものとせば其は單なる一般概念となり終るであらう。又本質は論證される事に依つて確實性を得るものでない事は既に明らかにした所である。形而上學に於ける方法は歸納とか論證とか言ふもの

より更に實在そのものに直接的であつたと考ふ可きである。アリストテレースは命題論の最初に於て<sup>1)</sup>デアレクチックの方法をば彼自身の論證法に比較し後者は確實なる前提より出發するものであるが前者は蓋然的なる憶見より出發するものとして其の學問的價値を認めてゐない。然しこの兩者は比較さる可きものではないであらう。寧ろアリストテレースがデアレクチックの方法は論證と歸納とを其れの特種なる二つの部門として自己の中に含むのである<sup>2)</sup>と言ふ時、デアレクチックに對する彼の正しき理解を見出し得るのではないかと思ふ。論證法と歸納法とは別々のものとして可能であるのではなく互に豫想し合ふものである。而して是の二つの方法の内的聯關をなすものは本質である。何となれば本質は事實の中から發見されるものでありながら而も其は本性的には第一のもの (*ἡ πρώτη τῆ φύσεως*) として事實の根據にその由來を持つものであるから<sup>3)</sup>。かくて本質それ自身の方法は歸納でも論證でもなく寧ろソクラテスのデアレクチックとも言ふ可きであらう。<sup>(註)</sup>

ソクラテスの哲學的方法は極くありふれた言葉に結び付き其の中に潛みかくれてゐる眞實在のロゴスを明らかにする事であつた。其れ故にソクラテスに於ては眞の學問とは言葉の種々なる意味に各方面から規定を與へつゝ實在の明徹 (*durchsicht-*

ding) にして劃然たる (schorfmissenen) 定義を獲得する事に外ならなかつたのである。<sup>4)</sup> 而して斯くの如き方法こそ實に又アリストテレースの形而上學に於ける實際の方法であつたのである。彼は形而上學に於て彼自身の哲學的方法に關して次の如くに明言してゐるのである。「總じて學問の過程はより尠く可知的のものを通じて本性に於てより多く可知的のものへ進む。恰も行爲に關する我々の學問的な仕事が各自に取つて善と考へられてゐるものから出發し其れ自身に善であるものを各自に取つて善たらしむる事である様に、此處に於ても我々の仕事は各自に取つて可知的のものから出發し本性に於て可知的のものをば各自に取つて可知的たらしむる事である。偕て個々の人々に取つて可知的であり最初である所のものは屢々極めて狭き範圍に於てのみ可知的なるものであり眞實性を有する事極めて尠きものである<sup>5)</sup>。けれども人は各自に取つて先づ可知的なるものから出發し本性に於て可知的なるものを理解する可く試みねばならぬ。」<sup>5)</sup> 是は歸納とか論證とか言はる可きものではない。アリストテレースが其の形而上學に於て實際に取つた方法即ち種々なるドクサを問題としながら漸次實在の具體的なるロゴスへ達せんとした方法を此の言葉は如實に物語るものである。ソクラテスのダイアレクチックの出發

點はドクサであつたと同様にアリストテレースの形而上學に於ても問題の發足點はドクサであつたのである。

各自に取つて可知的であり最初であるものは常にドクサに結びついたものである。ドクサは其が一面的抽象的であると言ふ點に於て眞實在の完全なるロゴスからは嚴密に區別されるのである。然しアリストテレースの方法は種々なるドクサの吟味(*εργασίαν*)を通して眞實在の完全なるロゴスへ達せんとする事であつた。其れ故にドクサからロゴスを嚴密に區別すると言ふ事はドクサを見捨てる事ではなく却てドクサを正しく活かす事でない。アリストテレースは形而上學に於て次の様にさへ言つてゐる。「我々が問題とし得る様なドクサを主張した人々に對しては勿論の事、極めて表面的觀察に基くと思はれる様なドクサを主張した人々に對しても我々は當然感謝しななければならない。何となれば彼等と雖も、何等かの意味にて思想の發展に寄與する所があるからである。まことに若しテモテウスがゐなかつたら我々の今持つ多くの抒情詩は與へられなかつたに違ひない。然しながら若し一人のフリニス無かりせばテモテウスは終に現はれずして終つたであらう。此の事は眞理に關して種々なるドクサを残して置いて呉れたと人々にも同

様に當はまる所である」と。<sup>6)</sup> アリストテレーズはドクサは抽象的の一面的なる故是を眞のロゴスから嚴密に區別すると同時に、既に何等かの意味に於て眞理を物語るものとして是を尊重したのであつた。若し全くドクサが與へられてゐなかつたとして我々は如何にして眞實在の具體的なロゴスに達す可きかを知らないであらう。ソクラテスのダイアレクチックと雖も種々なるドクサの檢討を経てのみ始めてその目的は達せられるのである。偕て我々はドクサが本質のロゴスへの手掛りである事をばドクサそのものゝ性質を見極める事に依つて明らかにする事が出来るであらう。

アリストテレーズが問題として取扱つたドクサの意義は種々なる意味に解せられ決して一樣ではなかつた。然し我々は先づドクサの一般的定義から出發しようと思ふ。ドクサは先づ單なる感覺からは明らかに區別されなければならない。感覺はそれの對象に關しては常に眞であり誤る事は無いものである。けれどもドクサは眞理と同時に誤謬をも含むものであり其の事に依つて感覺から區別されるのである。<sup>7)</sup> 感覺は一切の動物に共通のものであるがドクサを持ちうる者は理性を有するものに限られてゐる。<sup>8)</sup> 次にドクサは其が確信 (Firmness) を持つ事に依つてファン

タジアから區別される。<sup>8)</sup> ドクサは我々の方に依つては自由にならぬものを含んでゐるのである。我々が或事は怖る可き事であるとか又は驚く可き事であるとか言ふ事に關してドクサを持つ場合には同時に其れと相應せる感情に依つて心を動かされるであらう。けれどもフアンタジアに於ては其れとは全く異り恐怖や驚きを示す繪畫を見ても我々はそれに依つて心を動かされない。<sup>10)</sup> 誤謬を含みながらも尙ビスチスを持つと言ふ事はドクサの著明なる特徴であると言はれやう。こゝに誤謬を含みうると言ふ事とビスチスを持つと言ふ事とは離す可からざる關係に於てある様に見える。そは偕て措きドクサの持つビスチスは何處から來るものであるか。ビスチスを持つと言ふ事は何か動かす事の出來ぬものに依つて説服されて在る事である。而してそれは實にロゴスの説服或は支配に外ならない。アリストテレーシスはデアニマに於て次の如く言つてゐる、凡てのドクサはビスチスを伴ひビスチスは説服されると言ふ事を伴ふ。而して説服されると言ふ事はロゴスを伴ふ事である。<sup>11)</sup> かくてドクスは誤謬を含みながらも既に實在の片影を捉へてゐるものであると言へやう。實在に關して何ものかを主張するものである限りドクサはロゴスの支配の下に在りビスチスを伴ふのである。ドクサ自身の斯くの如き性質こ

そドクサの吟味に依つて眞實在のロゴスを明らかにしやうとした形而上學の方法をば可能にしたのである。ドクサの持つ誤謬を一つ一つ取り除ける事に依つて實在の具體的なロゴスは達せられるのである。何等かの意味にてピステスを持つ者のみより正しきピステスへ導く事が出来るが、未だ何等のピステスをも持たぬ者に就いてはこの事は不可能である。<sup>12)</sup>

我々は此處でアリステレスが問題としたドクサを二つの種類に區別して見る事が出来る。(一)餘りに感覺的なるドクサ、(二)餘りに概念的なるドクサ。但し是はドクサの本質的區別ではない事を斷つておかねばならぬ。プロタゴラス等の感覺主義の主張は第一の部類の代表的なるものであらう。プロタゴラスは我々に現はれるまゝの存在をそのまゝ眞なりとする。けれども我々に現はれるまゝの存在は或人に或時に或意味にて而して或仕方では現はれるのである。<sup>13)</sup>其は極めて狭き範圍に於てのみ可知的であり限定され得るものではあるが未だ限定されてゐないものである。流動變化するまゝの現象としての存在をそのまゝ眞實在なりとして確執する時はクラチルスの如き懷疑主義に陥るのは必然であらう。變轉するものは變轉する限りとしては實在するとは言はれない。けれども其處にも尙議論の餘地が

ある。即ち或ものが消滅する時には消滅しないものが考へられ、生成する時には生成の出発點と動かすものど行き着く所とが無ければならない。<sup>14)</sup>次に第二の部類に屬するドクサの代表的なるものを我々は自然哲學者の諸説に於て見る事が出來やう。アリストテレースは言ふ「彼等は凡て觀察した事實そのものゝ理論を求めやうとはせず、却て事實の觀察をば彼等自身のドクサに押し附けやうとする」<sup>15)</sup>と。抽象的理論に對しはアリストテレースは常に事實に立脚しながら其の困難を指摘し其を解決する可く困難の依つて生じた發源地を考察する。斯くの如き方法の代表的なるものを我々は形而上學第一卷第三節より第十節迄に於て是を見る事が出来る。ミレートス學派は質料因のみを考へた。然し質料因のみにては何故に生成の事實があり得るのか説明出來ないであらう。其で生成の事實があり得る爲めには其處から運動が起つてくる動力因を必要とする。<sup>16)</sup>又エムペドクレスは愛憎の二原理を考へそれを一切の生成の原理とした。けれども彼は一切の事物が或目的の爲めに存在し生成すると言はずして只生成の過程の出發點としてのみ動力因を考へてゐた。<sup>17)</sup>

生成するものゝ本質は生成の過程のテロスに於て始めて現はれるものではある

が其は本性的に最初のものとして始めからあつたものであつたと同様に本質の定義も抽象的なるドクサの吟味を通じてのみ具體的な姿を以て出現するものではあるが、其は本性的には既に説服し支配するものとして始めから在つたものでなければならぬ。學ぶと言ふ事も矢張り潜勢から現勢への過程であり廣き意味に於て運動であると言はれやう。かくてアリストテレースに於ては眞實在としての本質は存在の出發點であり眞理の出發點であつた<sup>18)</sup>と言はれるばかりでなく實に又方法そのものをも規定せるものであつたのである。

(註) アリストテレースの歸納法は深き意味に解する事も出来、決して論證法と對當に言はる可きものでもないと言ふ事も出来るであらう。その意味に於てはドクサのエレクエスも矢張り一種の歸納であるとも言はれる。然し此處に歸納法と言ふのは論證法と對立して言はれてゐるのみのものである事を斷つておく。

- (1) Topica 100<sup>a</sup> 25—100<sup>b</sup> 23 (2) Topica, 105<sup>a</sup> 10 (3) Trendenburg, Geschichte d. Kategorienlehre, S. 49. (4) Meteor, Syllogistik d. Arist. II. 2. S. 186, 187. (5) met. 1029<sup>b</sup> 6—10. (6) met. 993<sup>b</sup> 11—18. (7) De Anima, 427<sup>b</sup> 24 (11) De Anima 428<sup>a</sup> 24 (12) met. 1086<sup>a</sup> 19 (13) met 1011<sup>a</sup> 22. (14) met, 1010<sup>a</sup> 15 (15) De Caelo, 293<sup>a</sup> 25 (16) met. 984 17—25 (17) met, 988<sup>b</sup> 9. (18) met, 1034<sup>a</sup> 30.

是は今年一月卒業論文として提出したものである。テキストは凡てロス氏監修のオクスフォード版英譯に依れるものなる事を附記しておく。實在と言葉とが、離れ難き一致を示してゐたギリシヤの哲學を異國の言葉に移されたものに依つて理解するのは冒險であるとも言はれやう。口頭試問の時先生から頂いた御示唆に従つて考へ直して見る可きであつたが色々の事情でそのまゝにしておいた。(四・六・三)